

コラム 人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

生徒指導の実践上の4つの視点との関係

『生徒指導提要』が掲げる「生徒指導の実践上の4つの視点」と、交流分析における「ストローク理論」は、児童生徒の「心の基盤（土台）」を育むという目的において密接に関連しています。

1. 自己存在感の感受 × 無条件の肯定的ストローク

名前を呼んで挨拶する、視線を合わせる、微笑む、話を最後まで丁寧に聴くといった「無条件の肯定的ストローク」による関わりです。これらは、成果や能力に関係なく「ありのままの自分を受容されている」という人間のよさ体験を生み出し、心の土台を耕します。

2. 共感的な人間関係の育成 × 肯定的ストロークの交換

相手の良さを認めるメッセージの交換や、失敗しても「大丈夫だよ」と受け止める姿勢です。逆に、人格を否定する「無条件の否定的ストローク」を排除することで、信頼関係の破壊を防ぎます。集団の中で肯定的ストロークを互いに送り合う文化を醸成することが重要です。

3. 自己決定の場の提供 × 条件的肯定的ストローク

「自分で決めて取り組めたね」「その考え方は面白いね」といった、決定の内容やそこに至るプロセス（努力や工夫）を認める「条件的肯定的ストローク」が、次の挑戦へのエネルギーとなり、具体的な行動やプロセスに対する賞賛（具体的賞賛）が、自己効力感を高めます。

4. 安全・安心な風土の醸成 × ストローク飢餓の防止

授業中の「立ち歩き」などを叱責（否定的ストローク）する前に、「ノートを開いている」「前を向いている」といった当たり前の行動（0点からの加点）を実況中継のように認める（描写する）ことで、安心できる居場所を保障します。教室に肯定的なストロークが溢れている状態は、「ストローク飢餓」による問題行動（注目を得るためにわざと叱られるような行動をとる等）を未然に防ぎます。

『生徒指導提要』の実践上の4つの視点は、学校生活のあらゆる場面で肯定的ストロークを意図的に散りばめることによって具体化されます。特に、「無条件の肯定」によって「安心の器（心の基盤）」を整えることが、すべての生徒指導の出発点となるのではないのでしょうか。（高橋）



Vol.53

発行日 令和8年9月

岡山県教育庁 人権教育・生徒指導課

生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

心を育む 「ストローク」③ ～発達支持的生徒指導として～

『生徒指導提要』が示す「発達支持的生徒指導」と、交流分析の「ストローク理論」は、児童生徒の成長を支える「土台づくり」という観点で極めて高い親和性を持っています。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

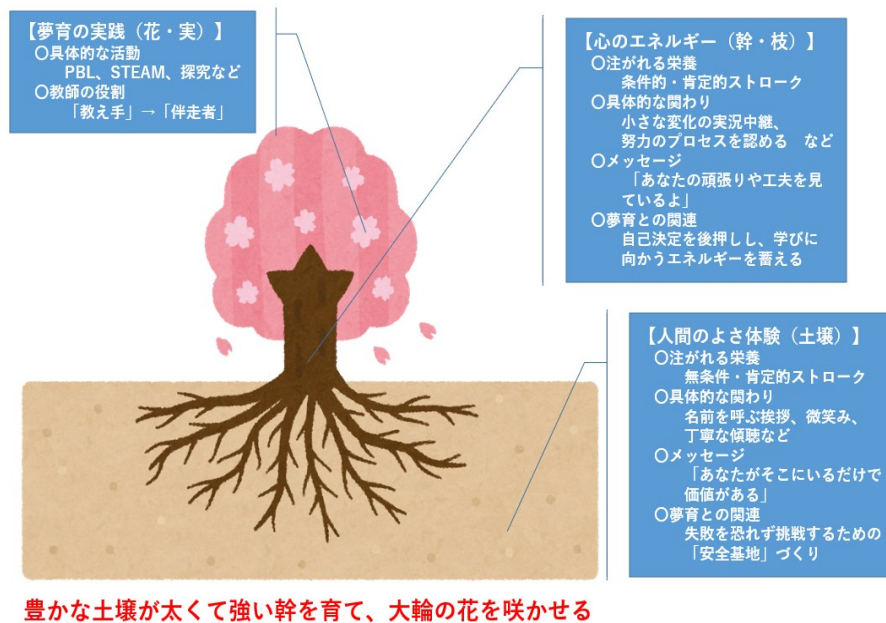
〒700-8570
岡山県岡山市北区内山下2-4-6
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134

Q.「発達支持的生徒指導」を進める上で、ストローク理論は生かされますか？

A.『生徒指導提要』が示す「発達支持的生徒指導」と交流分析の「ストローク理論」は、児童生徒の成長を支える「土台づくり」という観点で極めて高い親和性を持っています。

教育活動の基盤

例えば、現代の学校では、PBL（課題解決型学習）や主体的な学びを通じて、児童生徒が自ら課題を見つけ解決する力を育むことを目指しています。しかし、こうした高度な「社会的能力（スキル）」を発揮するためには、その根底にある「心の基盤（土台）」が安定している必要があります。土壌（心の基礎）が乾ききっていても、いくら高度な学びの種をまいても、豊かな花を咲かせることはできません。



© Norihisa TAKAHASHI Okayama Prefecture Board of Education Human Rights Education and Student Guidance & Counseling Division

「恐れず挑戦できる」環境の醸成（土壌）

岡山県は、学校を「失敗を恐れず挑戦できる場所」にすることを目指しています。これには、失敗しても自分の価値が否定されないという心理的安全性が不可欠です。

親和性： ストロークが不足した「ストローク飢餓」の状態では、児童生徒は注目を得るために不適切な行動（負の注目集め）に走ったり、失敗を極端に恐れたりします。日頃から無条件の肯定的ストロークで児童生徒の「心の器」を満たしておくことは、失敗しても「自分は大丈夫だ」と思えるレジリエンス（立ち直る力）を育み、誰一人取り残されない夢育の実現を支えるセーフティネットとなります。



『提要』のダウンロード
はコチラ

「自己決定」を支える肯定的ストローク（幹・枝）

岡山県の教育活動では、「自ら考え決定できる場面」を増やし、「自己決定」を重視しています。自ら選択し、決定する体験は、児童生徒の主体的成長に不可欠です。

親和性： 児童生徒の自己決定に対し、教師が「自分で決めて取り組めたね」といった条件的肯定的ストローク（具体的賞賛）を送ることで、児童生徒は自己効力感を高めます。このストロークが報酬（心のエネルギー）となり、「次も自分で決めて挑戦しよう」という夢育が目指す主体的なサイクルが加速されます。

「伴走者」としての教師の役割（花・実）

夢育において、教師は単なる知識の伝達者ではなく、学びを児童生徒に委ね、支援する「伴走者」として定義されています。

親和性： ストローク理論における「伴走」とは、日常の些細な関わり（挨拶、微笑み、丁寧な傾聴）を通じて、常に「あなたのことを見ているよ」というメッセージを送り続けることです。教師が「実況中継（行動の説明）」などのスキルを用い、児童生徒のプロセスに肯定的な注目（ストローク）を与え続ける姿勢は、夢育が求める「伴走者」の具体的な体現そのものです。

温かいメッセージ

POINT

土壌、幹・枝、花・実、それぞれに応じたストロークを与える